

静岡大学 2017年のトピック

静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター 森林生態系部門

(1) 教育： スタッフが増えてメニューが充実

教育スタッフの充実： 片畑特任助教が岐阜へ栄転され、後任として北大より動物個体群生態を専門とする高津さんが着任した。小学校へのアウトリーチング活動、魚釣りなどを利用した動物生態の講義など多数の教育活動を担当してもらい、教育の幅が大きく広がった。また、新たに博士研究員として、樹木分子生物学を専門とする鶴田さんが、教育、広報担当スタッフとして着任した。専門が同じ片畑さんの抜けた穴を埋めると同時に、Facebook や HP を活発に更新できるようになった。前認定事業で、実習用具や学習環境の整備が進んだので、これからはもっと人に投資して、教育の質を高めていきたい。

学内向け実習： 農学部生に向けた7実習を開講した。学部改組により、森林学科が生物資源学科に再編されて2年が経過し、実習も新しいカリキュラムに移行しつつある。特に、2年生を対象にした環境フィールドワークは、1年を通してフィールド科学に関する実習を演習林や農場で行うもので、微気象観測など、新しい内容の実習を多数行った。生物資源では2年生からフィールド、バイオ、木質、社会科学の4コースに分かれるのだが、フィールドは今年の1年生に何故か人気がない。理由はさっぱりわからないが、実習でもっとフィールドの魅力をアピールしたほうが良いのかもしれない。

学外向け実習（共同利用拠点事業）： 8実習を開講した。これまでの3つの公募型実習（森林保全学実習、インターンシップ、Field lecture）に加え、新たに森林圏総合実習を開講した。これは山岳プログラムの一部で、筑波大学から5名の修士学生を招き、Field lecture と合同で英語による野外実習やポスタープレゼンテーションを行った。もうひとつの新たな試みとして国際公募プログラムである Field lecture を国内でも公募したが、残念ながら応募がなかった。9泊10日という期間の長い Field lecture は、研究に忙しい修士学生には負担かもしれない。国際プログラムの魅力をもっと積極的に発信するとともに、期間を区切って参加できるようにするなどして、参加しやすくなるように改善したい。

先方の教員が体調を崩されて、東京都市大向けの生態管理実習は休講となった。その他の実習は全て開講され、実習メニューもかなり多彩になり内容が充実してきた。特に、高津教員の釣り実習は人気があった。アンケートの評価はどの実習でも上々なので、この調子でがんばりたい。

他： 宇佐美技術職員が罫免許を取得した。これで狩猟と獣害対策に関する実習メニューが増えただけでなく、ジビエ肉の試食など、演習林の新しい名物ができないかと、期待している。現在、解体方法の訓練を受けている。

(2) 天竜ランチ； モデル人工林プロジェクトが本格的に始動

3年前より環境保全と持続可能な木材生産を両立させるモデル人工林施業プロジェクトを開始したが、鳥類のカメラトラップや土砂移動観測機器、微気象観測機器などが充実し、環境モニタリングが軌道に乗ってきた。林地残材が土砂トラップとしてかなり機能する、土壌呼吸は施業よりもその場所の土壌環境の影響が大きい、といった事実が明らかになりつつある。

また、演習林だけでなく、周辺地域からの木材搬出を促進するための作業道の開設により目途がついた。これまで直営で管理してきたため、森林組合への委託には事務手続きのルールづくりなどに時間を要した。これからも他機関との協働を図り、施業の効率化と地域貢献を図りたい。

(3) 南アルプスブランチ； 防鹿柵の設置とダケカンバの種子採取

昨年に、1ha 規模のシカ柵を設置したが、範囲を広くしたことで余計にシカの攻撃を受け、昨年よりも侵入と食害がひどくなってしまった。今年はシカ柵を 2 重にして飛び越えられないように対策を施したが、もっと頻繁に見回ってケアする必要があるそう。荒廃していく森林を見ていられないため、シカ柵を順次拡大する方針であったが、まず、このプロットで手法を確立してからと方針を変える。

全演協のダケカンバの相互移植プロジェクトのための種子集めに取り組んだ。演習林のダケカンバはどれも背丈が高く、種子の採取に苦勞した。こうしたプロジェクトへの参加はスタッフ一同初めてで、種の取り方から精選、相互移植試験の方法など、いろいろと勉強になった。



フィールドレクチャー2017の集合写真

私を含め、今年は途中で風邪をひく学生が多かった。常備薬の配備が必要となるが・・・